

志賀直哉のまなざし

— 母から妻へ、そして、自己から他者へ —

松 井 貴 子

志賀直哉には自伝的要素の濃い小説作品、実生活から材料を得た随筆（小品）が多い。彼が外界を見る目は、身のまわりの近いところ、日常の行動範囲内に向けられ、意識は、自分の内面に向けられているように見える。習作期を経て、作家として本格的に執筆活動を始めからの直哉の作品には、特徴的な彼の視線と意識が反映されている。

このような直哉のまなざしと意識が作られた背景には、彼が育った志賀家の状況が大きく影響していると思われる。彼が育った志賀家には三世代が同居していた。大家族のなかで、直哉は祖父に傾倒する一方で、父直温とは、長年にわたって不和であった。加えて、彼には、祖母、実母、義母という三人の「母たち」がいた。（註1）直哉は、実母が健在であるにもかかわらず、乳児のときから祖母によって育てられた。そして、実母とは疎遠のまま、少年期に死別した。父直温が後妻を迎えたことで、直哉には、母親という立場にある女性が三人存在することになったのである。祖母に溺愛される一方、実母に親しまなかったこと、その実母の死後、すぐに、十一才違いの義母を受け入れなければならなかったこと、これらの経験は、直哉が安定した母親像を形成することを妨げたに違いない。彼は、父親とも、母親とも、親密な関係を築かないまま成長した。彼にとっては、まず、自分が置かれた複雑な環境を整合性を持って認識すること、分裂した父親像、母親像を統合することが必要であり、そのために、自己意識を確立することが、何よりも緊要であったはずである。このような家庭環境にあった結果として、環境認識のた

めの身辺注視、自己確立のための内面志向が強く現れるのは、自然なことだったであろう。これが、青年期を経て、結婚するまでの直哉、明治期の直哉であった。

そして、大正期の直哉には、生命観の深まりとともに、他者に対するまなざしに変化が見られる作品がある。この時期は、直哉の人生に大きな変化があった。山手線の事故で生死にかかわる経験をしたこと、結婚し、家長となったこと、長年、不和であった父と和解したことなど、いずれも直哉の人生観に影響を与えた大きな出来事である。これらのことが、直哉の作品に影響を与えたのである。

彼が他者を眺めるまなざしを形成したものの、そして、それに変化をもたらしたものについて、第一次世界大戦の傍観者でもあった大正期の志賀直哉の、特に生命を見つめるまなざしに注目して、彼が他者を見つめた眼の変化を探りたい。

一 母親たち—祖母、実母、義母

直哉の祖母留女は、嫁の銀が、直哉の兄にあたる長男を夭折させてしまったため、嫡男となった直哉を自分の手で養育した。留女は直哉を盲目的に愛し、直哉もそれに応えた。しかし、直哉は、自分の意志とは無関係に、実母銀に育てられる機会を奪われてしまったのである。

直哉と留女がいかに親密な「母子」関係であったかは、「大津順吉」に記された次のようなエピソードに象徴されている。

私は何年ぶりかで又祖母だけの看護を受けた。或時仰向けに寝ながら、祖母の仕てくれるままに腹の蒟蒻を取り更へて貰つてゐた。すると私には不図幼年時代の情緒が起こつて来た。夫れは祖母の体の独特な香が私に幼年時代——其頃はいつも抱かれて寝てゐた——を突然に憶ひ起したのであつた。(註2)

また、「祖母の為に」(註3)には、祖母への想い、特に祖母の死を恐れる気持ち満ちている。直哉によれば、この作品は、当時の病的なまでの心理状態を、事実のままに記録したものである。

このような完成稿以外にも、直哉はいくつもの草稿に、祖母が自分にこの上ない愛情を注いでくれていること、そして、自分も、実母や義母に対して感じるよりもはるかに強い愛情を感じることを書いている。作品以外では、これらの作品より早く、「自分は祖母を愛したい 祖母位自分を愛してくれるものはない」(註4)と友人宛の書簡で吐露している。

祖母留女に対しては実感を伴った愛情を抱く一方で、実母銀に対しては親しんだ記憶が無いまま、直哉は、満十二才で実母と死別した。直哉の記憶にある実母は、女中のように働いている様子、足袋のことで母をいじめたこと、母の妊娠を知って喜んだこと、母の死の床の様子という程度にすぎない。

祖母に比べて、実母といかに疎遠であったかは、作品中の次のような記述に集約されている。

私が母と別れたのは今から六十一年前で、殆ど母の記憶といふ程のものはない。私の「大津順吉」といふ小説に、病気で寝てゐる時、祖母が熱くした蒟蒻で下腹を温めてくれる、その時の祖母の体臭で不図自分の幼年時代を憶ひ出す事が書いてあるが、私は母の体臭は覚えてゐない。然し今でもはつきり憶ひ出せるのは母の足のふくらはぎに白い太い線のあつた事で、母は女中のやうに尻を端折り、白い腰巻を出し、四這いになつてよく縁側を拭いてゐ

たが、そのふくらはぎにその白い線があつたのを憶ひ出す。私は若い頃、女の人の足で、それを見る度に亡くなつた母を憶ひ出した。私はふくらはぎの白い線で漸くはつきり母を憶ひ出すことが出来るのである。(註5)

祖母と実母の体臭の存在感の違いが、そのまま、直哉の内面で祖母と実母の存在感の差として認識され、記憶されている。実母の体臭を感じられないほど遠い距離があつた直哉は、死別した後は、記憶が薄れて行くままであつたのであろう。後年、次のように記している。

五十何年か経つた今、母の面影はぼんやりして、殆ど捕へ難い。小さな写真が二つ残つてゐて、それらが、僅かに面影をしのお頼りになつてゐるが、共に母の二十歳前後のもので、紙に写した方は薄くなり、硝子板に写した方は破れてゐる。(註6)

直哉の記憶にある数少ない実母とのやりとりは、後で人から聞かされた内容も合わさって、苦いものになつていた。

母は自分の背後で「ハイ、足袋」と云つた。自分は知らん顔をして居た。自分は仕てゐる事に没頭してゐたのだ。それは夕食前の忙しい時でもあつたし母は自分が黙つてゐるので、気軽に「ハイ」と自分の頭に足袋を載せて彼方へ行つて了つた。自分は急に腹を立てた。直ぐ母を追ひかけて行つた。そして「失敬だ」と云つて怒つた。自分はしつこくそれを繰返してからだで突掛かつて行つた。気の弱い母は当惑して淋しい顔をしてゐた。然し自分は却々承知しなかつた。

ずつと後になつて自分は、自分が祖母の愛に増長して我儘で困ると母がよく泣いたと云ふ事を父から聞いた。それによると母を困らした事は毎々だつた。然し何も覚えてゐない。只足袋の事だけが頭に残つた。自分は其時の母の気持を想像して、さぞ淋しかつたらうと思つた。(註7)

直哉が生まれ育った環境では、実母との安定した関係を築くことは難しい。自分が選択する余地なく、このような状況にあった直哉は、そこから逃げることなく対峙した。彼の視線や意識は、自己の身辺や内面に向かわざるを得なかったのである。

直哉は、夢のなかで、何度も、母はどこかで生きていると思ったという。彼の深層意識は、実母の死を受け入れることを拒否しようとしているようでもある。

祖母に育てられていたまま、直哉は実母を失った。その悲しみを癒す間もなく、彼は、新しい母と暮らすことになった。直哉の義母となった浩は、先妻の死後まもなく、志賀家に後妻に入った。直哉の十二才のときからの母親となったが、彼女は、直哉が素直に母親と呼ぶには若すぎる女性であった。少年だった直哉は、浩を、亡き母より若く遙かに美しいと感じている。直哉の義母としての浩は、直哉と父直温の間に立って、両者の和解に尽力した。そして、直哉を志賀家の跡継ぎとして大切に扱う一方、実子には、きびしく接した。浩が産んだ男の子は、志賀家の三番目の男子という意味を込めてであろう、直三と名づけられている。家庭内での序列を意識させられる名前である。

身体的にも、精神的にも、男性としての成長期にあった直哉は、難しい年齢差のある義母に対して、次のような思いを抱いていた。以下は、手帳に記された彼の思いである。

母と余は血に於て何の関係もない 然し母子である、

而して母の余に対する躰度は、親が子に対するそれではない、余と母とが母子の關係に於て親しめない理由は色々あらう（祖母の事 年の事 性質の事）つまり余と母との親しみはア二嫁と義弟の親みに過ぎない、

母の心にすれば親みの性質は何であらうとも、兎も角一ト通りは親しく（それも、一方に親みを避けるといふ妙な矛盾もあるが）せねばならぬと。つまり、つかず離れずといふ六ヶしい親しみをイ持して行かねばならぬと思つてゐる。（註8）

直哉にとって、この若い義母を、新しい母親として受け入れるのは、非常に困難であり、少なからぬ苦しみがあったであろうことが想像される。独身時代の作品「濁った頭」の草稿には、次のような空想まで書かれている。

自分はよくこんな事を空想してゐた。若し母が自分に対し義理の子として以上の気持を示す場合があつたら、自分は母も父も妹も弟も自分も皆を非常な不幸に陥入れる行為であると云つて自分の身を引かうといふ空想をした。これは恥づべき空想であつた。（註9）

この部分は、定稿では削除されている。直哉はまた別の作品の草稿でも、義母との関係を記している。

自分は美しい後の母を心から愛した。後の母も自分には非常によくしてくれた。然し後の母は遂に一度も自分の母ではなかつた。（註10）

直哉と義母浩との関係は、義理の母子関係にすることも難しい母と息子の関係であつた。直哉の意識は、このように複雑な三人の母親たちとの関係に絡め取られ、もがいていたのである。直哉が三十才を過ぎて、自らの意志で結婚し、自分が家長となる志賀家という新しい家庭を得ることによって、このような状態が落ち着きに向かつたのである。

二 母から妻へ―妻康子

直哉の妻となつた康子（さだこ）は、直哉より六才年下であつた。勘解由小路資承（かでのこうじ すけこと）の長女で、武者小路実篤の従妹でもあり、華族の出身である。外見は、鳥毛立女屏風の美人に似た、ほっそりした小柄な美人であつたという。（註11）実篤の紹介により、直哉と結婚した。この結婚は、士族である志賀家に、華族の家から嫁を迎える形である。しかし、康子が、華族女学校中退で、再婚（前夫の死因は肺結核）であることな

どを理由に、志賀家は結婚に反対し、直哉と直温の不和が、さらに悪化した。こうして、直哉は、戸主反対の自由結婚をしたという理由のもとに、自ら望んでいた廃嫡を實行し、自分の志賀家を創設したのである。

大正期の直哉の動きをまとめると、次のようになる。

大正元 「大津順吉」により、初めて原稿料百円を得る（8月26日）

大正2 父と義母からの縁談を断わる（6月18日、22日）

山手線の電車にはねられて重傷を負い（8月15日）、27日まで入院傷の後養生のため城崎温泉に滞在（10月18日—11月7日）

大正3 第一次世界大戦の勃発を知る（8月初旬）

康子と挙式（12月21日）

大正4 婚姻届を出し（2月20日）、自ら廃嫡して、一家を創設（3月1日）

柳宗悦のすすめで、我孫子に家を買って移住（9月29日）

大正5 長女慧子誕生（6月7日）、夭折（7月31日）

武者小路実篤、我孫子に移住

大正6 三年間の休筆期を経て、創作意欲再燃

「城の崎にて」執筆（4月）

次女留女子誕生（7月23日）、父直温と和解（8月30日）

大正7 実篤、日向（宮崎）に新しき村建設のため、我孫子から転居（夏）

「十一月三日午後之事」の草稿「散歩」執筆

第一次世界大戦終結

大正8 長男直康誕生（6月2日）、夭折（7月8日）

「十一月三日午後之事」発表（1月）、「十一月三日午後之事」後日記（4月）

談（4月）

大正9 これまでの草稿をもとに、「暗夜行路」と題して、長編執筆開始

大正10 祖母留女、85才で死去（8月16日）

大正11 日記に「自分の生活を完全に創作本位のものに煮つめる」と記す（1月1日）

大正12 我孫子から京都に転居（3月2日）

大正14 奈良に転居（4月7日）、次男直吉誕生（5月26日）

康子と結婚したことで、直哉の生活は大きく変わった。

執筆活動を夜中にやり、昼ごろ起きて来るのは若い頃と同じであるが、自分の家庭を持ってからは、昼間の楽しみに子供と遊ぶことが加わった。穏やかな時間を楽しめるようになったのである。後年の直哉は、来客の無い日は、康子と二人で花札を楽しむことが多かったという。（註12）

直哉は、自分の生活を安心して康子に預けていたようである。食事に関して言うならば、子供のときに形成される味覚は、生涯にわたって味覚の基盤となるが、息子の場合、結婚によって母親から離れると、母親の味から妻の味に変わるといふ。直哉の志賀家の場合は、直哉が、祖父母の好みとは違う、自分の好みの味、こつてりとした洋風の味で康子に料理を作らせていた。康子の味付けは基本的には淡泊で、京都風の上品なものであったが、薄味になりすぎないように注意していたという。（註13）

洋風のソース類でも、おでんのつゆでも、「よく出来てる」かどうか、調へ終る間際に少量小皿につけ、「お父さま、ちよつと」と、直哉のところへ味見してもらひに持つて行くのが、長年康子夫人の慣はしになつてゐた。（註14）

自分の好みの味を、康子と共有できるように、直哉は、積極的に康子を外での食事に連れ出した。料理の味付けが単調にならないように、美味を追求したのであろう。

外で食事をするとすれば、直哉は事情の許すかぎり康子を連れて行きたがつた。（註15）

康子夫人は外でさういふ美味しい料理に出逢つて作り方を聞かされると、帰宅後、茶色の布表紙のノートブックに、こまかくそれを書きつけてゐた。

(註16)

このような康子の努力が実り、直哉は自分の志賀家の味に満足して、家庭に安らぎを得ることができたのである。

対談とか座談会のあと、会場の料亭で食事をすませて帰つて来ると、やれやれの調子で、「うちの飯がやつぱり一番美味いよ」と言つた。(註17)

正月の雑煮も、関東風から、康子夫人の作る丸餅白味噌の京風に変つた。

(註18)

そして、雑煮という行事食、地域性とともに、生まれ育つた家庭の特徴が色濃く現れるものまで、妻の色に染められて行つた。

直哉は、妻康子の存在によって、かつての母親たちから独立し、人生に安定を得たのである。康子は妻であると同時に、直哉が求めて得られなかった「母」でもある。

夢では私の家内が私の母になつてゐる。病気で苦み、二三人が附添つて介抱してゐるところを私は襖を一寸開き、その様子をこはく覗いて見た。

(註19)

其所にゐる病人は私の家内でありながら、私との関係では母になつてゐるのをかしく、父と考へられてゐる人物は私の家内との関係で、私自身なのが更に変だつた。私は夢の中で父なる私自身を腹で非難してゐるのである。

(註20)

直哉は、妻としての康子を信頼し、頼りきつてゐることを人前でも隠さなかつた。

私は来世は信じないが、仮りに来世があつて、再び結婚せねばならぬやうな場合には、出ず入らずにやはり今の家内を貰ふだらう。(註21)

直哉は、冗談めいた口調ではあるが、康子のいる前で、次のようにも言つたという。

「僕はね、康子にこう言つてあるんだ。康子は僕より先に死んではいけない。ただし、僕が死んだ翌日に康子が死ぬのは一向にかまわない……。もし康子に先に死なれたら、こっちがたまらないからね」(註22)

このように、心に安らぎを得たことで、直哉は、自己を客観視するだけでなく、他者に対して眼と意識を向ける余裕を持つことができるようになったと思われる。ここに、自己の生死にかかわる体験と第一次世界大戦という社会の動きが加わつて、直哉のまなざしは、自分とも、自分の家族とも関係のない他人の生命にまで向けられた。そして、このような直哉の意識をとらえたものが作品に結晶したのである。

三 生命へのまなざし―自己から他者へ

直哉は、康子と結婚する前年、電車事故で重傷を負い、生命について切実に考える時間を持つことになった。そして、傷の養生のために出かけた城崎温泉で、動物たちの生命の様々な様相を眼にした。こうして書かれた作品が「城の崎にて」である。この作品について直哉は「創作余談」で次のように述べている。

これも事実ありのままの小説である。鼠の死、蜂の死、ゐもりの死、皆その時数日間に實際目撃した事だつた。そしてそれらから受けた感じは素直に且つ正直に書けたつもりである。所謂心境小説といふものでも余裕から生れた心境ではなかつた。(註23)

この作品には、生命へのまなざしと自己感覚としての生死の体感が現れている。城崎温泉で養生しながら、直哉は、自分の生死の境について考えを巡らしていた。

今頃は青山の土の下に仰向けになつて寝てゐる所だつたなど思ふ。青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中も其儘で。祖父や母の死骸が傍にある。それももうお互に何の交渉もなく、——こんな事が想ひ浮ぶ。(註24)

直哉は、事故の被害者であつた。突然に、自分の生命を奪われてしまうかもしれないのであつたのである。結局、致命傷には至らなかつたが、自分が死ぬことに對して、次のような感慨を抱いている。

それは淋しいが、それ程に自分を恐怖させない考だつた。何時かはさうなる。それが何時か?——今迄はそんな事を思つて、その「何時か」を知らず／＼遠い先の事にしてゐた。然し今は、それが本統に何時か知れないやうな気がして来た。自分は死ぬ筈だつたのを助かつた。何かが自分を殺さなかつた、自分には仕なければならぬ仕事があるのだ、(註25)

直哉は、死ぬべくして死ぬこと、天寿を全うしての死のように、自分が納得できる死に對しては受け容れる気持ちを持った。ここで直哉は、「自分の心には、何かしら死に對する親しみが起つてゐた。」(註26)とまで言っている。

そして、直哉は、蜂、鼠、蠐螬、それぞれの死の様相を眺めることになる。

或朝の事、自分は一疋の蜂が玄關の屋根で死んで居るのを見つけた。足を腹の下にぴつたりとつけ、触角はだらしなく顔へたれ下つてゐた。他の蜂は一向に冷淡だつた。巢の出入りに忙しくその傍を這ひまはるが全く拘泥する様子はなかつた。(註27)

蜂を眺める直哉は、傍観者である。蜂の生死に全く関わりのない立場で見ている。おそらく寿命が尽きて死んだであろう働き蜂の死を、次のように感じている。

忙しく立働いてゐる蜂は如何にも生きてゐる物といふ感じを与へた。その傍に一疋、朝も昼も夕も、見る度に一つ所に全く動かずに俯向きに転つてゐるのを見ると、それが又如何にも死んだものといふ感じを与へるのだ。それは三日程その儘になつてゐた。それは見てゐて、如何にも静かな感じを与へた。淋しかつた。他の蜂が皆巢へ入つて仕舞つた日暮、冷たい瓦の上に一つ残つた死骸を見る事は淋しかつた。然し、それは如何にも静かだつた。(註28)

忙しく／＼働いてばかりゐた蜂が全く動くことがなくなつたのだから静かである。自分はその静かさに親しみを感じた。(註29)

死がもたらす淋しさと静かさを直哉の心は拒否していない。死は孤独である。生きてゐるとき自分のまわりにいた仲間と離れて、独りで死出の旅に出なければならぬ。それゆえの淋しさであろう。直哉は孤独感に加えて、静寂も感じとっている。生きるべき一生を生きた末の死、このような死を直哉は、恐れることなく、受け止めている。

蜂の死骸が、どこかに行つてしまつた後、直哉は、他の見物人たちとともに、鼠を見た。

鼠は一生懸命に泳いで逃げようとする。鼠には首の所に七寸ばかりの魚串が刺し通してあつた。頭の上に三寸程、咽喉の下に三寸程それが出てゐる。鼠は石垣へ這上らうとする。(註30)

鼠は石垣の間に漸く前足をかけた。然し這入らうとすると魚串が直ぐにつかへた。そして又水へ落ちる。鼠はどうかして助からうとしてゐる。顔の表

情は人間にわからなかつたが動作の表情に、それが一生懸命である事がよくわかつた。鼠は何処かへ逃げ込む事が出来れば助かると思つてゐるやうに、長い串を刺された儘、又川の真中の方へ泳ぎ出た。(註31)

鼠の姿は明らかに異常である。この鼠の死は自然なものではない。鼠の生命は、故意に奪われようとしている。ここでも直哉は傍観者であつたが、強い不快感を感じている。

自分は鼠の最期を見る気がしなかつた。鼠が殺されまいと、死ぬに極つた運命を担ひながら、全力を尽して逃げ廻つてゐる様子が妙に頭についた。自分は淋しい嫌な気持ちになつた。(註32)

鼠は自分が置かれた状況を落ち着いて認識することもなく、半ば錯乱した状態で、生命体としての生存本能に頼つて行動している。直哉が不快感を感じたのは、鼠が必死にもがいている行為そのものに對してではなく、鼠自身が致命傷を負っていることを気づかないままであることに對してである。死が避けられないものになつてゐるにもかかわらず、それがわからないまま、苦しみ続けなければならないことに、直哉は恐怖を感じた。そして、魚串が刺さつた鼠と事故で怪我をした自分を重ね合わせている。

自分は自分の怪我の場合、それに近い自分になつた事を思はないではゐられなかつた。自分は出来るだけの事をしようとした。自分は自身で病院をきめた。それへ行く方法を指定した。若し医者が留守で、行つて直ぐに手術の用意が出来ないと思つて電話を先にかけて貰ふ事などを頼んだ。半分配意識を失つた状態で、一番大切な事だけによく頭の働いた事は自分でも後から不思議に思つた位である。しかも此傷が致命的なものかどうかは自分の問題だつた。(註33)

フェータルなものだと若し聞いたなら自分はどうかだらう。その自分は一

寸想像出来ない。自分は弱つたらう。然し普段考へてゐる程、死の恐怖に自分は襲はれなかつたらうといふ気がする。そしてさういはれても尚、自分は助からうと思ひ、何かしら努力をしたらうといふ気がする。それは鼠の場合と、さう変らないものだつたに相違ない。(註34)

逃れられないかもしれない死に對して、それを回避するべく最大限の努力をすることによって、死の恐怖に立ち向かうのである。すべての力を尽した果ての死ならば、受容できるかもしれないと直哉は考えたのであろう。

最後に直哉は蟻蝨に出会つた。直哉は、蟻蝨を驚かすつもりで石を投げたが、当てるつもりがなかつた石が命中して、蟻蝨は死んでしまう。

蟻蝨だ。未だ濡れてゐて、それはいい色をしてゐた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、凝然としてゐた。体から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸程流れてゐる。自分はそれを何気なく、踞んで見てゐた。(註35)

自分は蟻蝨を驚かして水へ入れようと思つた。(註36)

石の音と同時に蟻蝨は四寸程横へ跳んだやうに見えた。蟻蝨は尻尾を反らし、高く上げた。(註37)

蟻蝨の反らした尾が自然に静かに下りて来た。すると肘を張つたやうにして傾斜に堪へて、前へついてゐた両の前足の指が内へまくれ込むと、蟻蝨は力なく前へのめつて了つた。尾は全く石についた。もう動かない。蟻蝨は死んで了つた。(註38)

蟻蝨に對して直哉は加害者である。意に反して、蟻蝨を死に追いやつたことに驚き、後悔と嫌悪感を感じている。

自分は飛んだ事をしたと思つた。(註39)

其氣が全くないのに殺して了つたのは自分に妙な嫌な氣をさした。(註40)

そして、蠓の死について、様々に考えをめぐらせる。

素より自分の仕た事ではあつたが如何にも偶然だつた。蠓にとつては全く不意な死であつた。(註41)

蠓と自分だけになつたやうな心持がして蠓の身に自分になつて其心持を感じた。可哀想に想ふと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた。自分は偶然に死ななかつた。蠓は偶然に死んだ。(註42)

死んだ蜂はどうなつたか。其後の雨でもう土の下に入つて了つたらう。あの鼠はどうしたらう。海へ流されて、今頃は其水ぶくれのした体を塵芥と一緒に海岸へでも打ちあげられてゐる事だらう。そして死ななかつた自分は今かうして歩いてゐる。(註43)

生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた。それ程に差はないやうな氣がした。(註44)

蠓の死が偶然の事故として合理化され、直哉の死生観が整理される。寿命として運命づけられた死、自ら抵抗した果ての死、そして、避けられなかつた事故の結果としての死は、恐怖も怒りも感じることなく、穏やかに迎えることができるであらう心境にまで至っている。

この翌年、第一次世界大戦が始まつた。この戦争中、日本は中国大陆とシベリアに出兵した。嚴寒の地への出兵を想定して行われた軍事演習での兵士たちの様子を目の当たりにした直哉は、心の中に激しい怒りを感じている。その心の動きは、「十一月三日午後の事」に描き出されている。この日は、「晩秋には珍しく南風が吹いて、妙に頭は重く、肌はじめ／＼と氣持の悪い

日だつた。」(註45)という。直哉は、從弟と散歩のついでに、鴨を買いに出かけた。そこで、演習中の兵士たちの、常識では考えられない様子を目の当たりにする。

蒸し風呂から出て来た人のやうな汗の玉が皆の顔に流れて居る。そして全く黙り込んで、只急ぐ。汗と革類とから来る変な惡臭が一緒にについて行つた。(註46)

街道へ出ると、五間程先の道端に上半身裸体にされた兵隊が仰向けに背囊に倚りかかつて寝てゐた。一人が看護して居る。胸にハンケチを当てて、それに水筒から水をたらして居た。病人は意識も不確らしく眼をつぶつた儘、力なく口を開けて居た。其癡顔だけは汗ばんでかなりに赤い。変な氣がした。立ち止つて見るのがいやだつた。(註47)

隊の中頃へ来て自分は全くまるつて了つた一人の兵隊を見た。両側から一人づつ其腋の下に腕を差し込んでまるつた儘にどん／＼隊の歩度で急いで行く。其兵隊はもう眼を開いてはゐなかつた。そして泥酔した人のやうに、肩に据らない首を一足毎に仰向けに、或ひは右に左に振つてゐた。

同じやうな人が又来た。其顔には何の表情もない。苦痛の表情さへも現れない程苦しいのだと云ふ氣がした。丁度踏切りを越える時に足がレールの僅な溝に引懸ると、其人は突き飛ばされたやうに前へのめつて了つた。支へてゐた兵隊の腕にも力はなかつた。そして倒れた人は何も云はない。倒れたきりで居る。

急ぎ足の隊は其処で一さきへぎられると後から／＼人が溜りかけた。

「止つちやいかん」と士官が大きい声で云つた。流れの水が石で分れるやうに人々は其処で二つに分れて過ぎた。人々の眼は倒れた人を見た。然し黙つてゐる。皆は見ながら黙つて急ぐ。

「おい起て。起たんか」頭の所に立つてゐた伍長が怒鳴つた。一人が腕を持つて引き起さうとした。伍長は続け様に怒鳴つた。倒れた人は起きようと

した。俯伏しに延び切った身体を縮めて一寸腰の所を高くした。然しもう力
はなかった。直ぐたわいなくつぶれて了ふ。二三度其動作を繰り返した。芝
居で殺された奴が俯伏しになった場合よくさう云ふ動作をする。それが一寸
不快に自分の頭に映った。倒れた人は一年志願兵だった。他の兵隊から見
ると背も低く弱さうだった。

「これは駄目だ。物を去つてやれ」と士官が云った。踏切番人のかみさん
が手桶に水をくんで急いで来た。自分はそれ以上見られなかった。何か狂暴
に近い気持が起つて来た。そして涙が出て来た。(註48)

直哉は、自分と同じ一年志願兵(註49)が半死の状態になっているのを見
るに至って、憤りが頂点に達している。このときの直哉には、自分がかつて
徴兵検査で甲種合格となり、逃れ切れなくて入営したときの記憶が蘇ってい
たであろう。入営時に撮影した写真には、この世の終わりのような表情をし
た直哉が写っている。直哉は一年志願兵となることによって、まず、少しで
も軍にいる時間を短縮することを考えた。そして、軍医の診断によって徴兵
免除となり、わずか九日間で軍隊生活から解放されている。結果として直哉
は徴兵忌避に成功したわけであるが、それは、一般の兵士たちが簡単にでき
ることではない。直哉は、この経験も重ねて兵士たちを見つめている。

五六間来ると其処にも一人倒れて居た。力なく半分閉ぢた眼をしてゐなが
ら、其兵隊は上半身裸体のまま起き上がつて歩き出さうとする。それも全く
口をきかずに。(註50)

十間程来ると其処に又一人倒れて居た。どれもこれも、ぼんやりと何の表
情もない顔をして居る。(註51)

少し行くと又一人倒れて居た。

「水を少し貰へませんか」それを看護してゐる兵隊が丁度其処へ通りかか
った四人連れの兵隊を見上げて声をかけた。「両方一滴もなくなつちやつた」

「少しあるだらう」とかういつて其内の一人が立ち止つて自身の水筒を抜
いて渡した。

兵隊は眼をつぶつて仰向けになつてゐる兵隊の口にそれから僅な量をたら
し込んだ。次に額に二三滴、ハンケチをかけた胸に二三滴、丁度儀式か何か
のやうにたらずと、其僅な水も使ひきらぬやうにして礼を云つて立つて居る
兵隊に返した。其兵隊は水筒を受け取ると仲間を追つて馳けて行つた。(註
52)

自分達はそれから二三町の間になほ四五人さう云ふ人々を見た。(註53)

何人もの兵士たちが、おそらくは、熱中症ですぐにも手当てが必要な状態
になったまま、ほとんど放置されている。脱水症状の兵士たちに与えられる
水も全く十分ではない。そのような仲間の様子を横目で見ながら、次は自分
が同じ状態になるかもしれないにもかかわらず、他の兵士たちは、躊躇する
ことなく演習遂行の命令に従っている。直哉の眼には、彼らの行動が、何の
疑念も危機感も持たないままで見えた。

兵士たちが直面している死は、直哉が城崎温泉で眼にした蜂とも鼠とも蠅
とも違う。運命づけられた死ではない。何の抵抗もしないまま生命を失お
うとしている。不運な事故でもない。苛酷な軍事演習は全く人為的なもので
ある。この演習で生命を落としたとしたら、それは、名誉の戦死でさえもな
い。ここでの兵士たちの死に何の意味があるのか、兵士たちを死なせる、ど
んな合理的な理由があるのか、直哉にとっては、全く納得できない死である。
ここで起ころうとしている死は、淋しいどころのものではなく、静かなもの
として受け容れ得るものでもない。

このような兵士たちの描写が続くなかに、野生の鴨の動きが挿入される。
この鴨は兵士たちに対比されている。

野生の鴨は、銃声を聞くや否や、即座に危険を察知し、逃げ出す。警戒心
は健在であり、逃げ出せるだけの精神と身体のある自由がある。

二三発続いて銃声がした。近い所で、急に鴨が頓狂な声で鳴き立てた。遠くの方で小鴨の一群が飛び立つた。銃声は尚続いた。脅されて、鴨の群は段々高く舞ひ上った。(註54)

野生の鴨に対して、飼育された鴨には、何の警戒心もない。食用になるために飼育されたのであるから当然ではあるが、確実に殺される状況にあるにもかかわらず、何の抵抗もしない鴨の死は、直哉には受け容れがたいものに感じられたのである。

青くびの鴨を一羽、羽交で下げた主と出会った。自分は其鴨の無邪気な突き出してゐる顔を見ると今二三分の間に殺して了ふのが不快になった。(註55)

主はひねりかけた其手つきのまま、土間へ入つて来た。鴨はあばれもしなければ、鳴きもしなかった。(註56)

この鴨の様子は、演習でそこかしこに倒れている兵士たちの姿に重なる。抵抗する意志も、逃げ出す自由も奪われたまま、生命の危険にさらされている鴨と兵士たちである。朦朧とした意識下で、なお命令に従おうとする兵士さえいる。そして、まだ倒れていない兵士たちも、従順に演習を続けている。誰も何も気づかされないままなのである。

多くの兵士たちがその後どうなったか、直哉は見届けていないが、兵士たちを見た記憶が生々しく残っている状態で、自分が買って帰ってきた瀕死の鴨の様子を見る。

帰ると直ぐ自分は風呂敷の鴨を出して見た。羽がひを交叉して其下に首を仰向けに差し込んであった。此間まで鳩を入れて置いた小屋の中で自分はそれを自由にやってた。然し鴨は半死になつてゐた。羽ばたきをして地面をかけようとするが首がもう上らない。のどを延ばして、それを地面にすりつ

けて只もがいた。自分は出して池へ放して見た。然し何故か真直ぐには浮ばない。直ぐ裏がへしになつて白い腹を見せ、ばた／＼騒いだ。自分は重ね／＼不愉快になつた。(註57)

鴨は、死んではいけないものの、もはや健全な状態ではない。演習で倒れていた兵士たちも、生命は取りとめても、とりかえしのつかない後遺症が残ったかもしれない。兵士と鴨は同じなのである。

自分は一人になると又興奮して来た。それは余りに明か過ぎる事だと思つた。それは早晩如何な人にもハッキリしないでは居ない事がらだ。何しろ明か過ぎる事だ、と思つた。総ては全く無知から来てゐるのだと思つた。(註58)

兵士たちは、自分の生命が理不尽に、無意味に奪われることに、何の警戒心も抱かないように教育され、大切なことは何も教えられていないのである。人間が、食用に飼われている鴨と同じ状態にあることに直哉は、強い憤りを感じた。

一年志願兵となり徴兵忌避をした自分、妻子を得た自分、生死の境にあつて死なないで生かされた自分、動物たちの生死に関わつた自分、これらが、兵士たちへのまなざしに入り込み、他者との共感覚としての生死の感覚になっている。直哉の思いが集約されたこの言葉は、太平洋戦争後まで、削除されることがなる。直哉は、兵士の一人が自殺したという内容の後日談を追加したが、それも同様であつた。

「十一月三日午後の事」について直哉は「創作余談」で次のように述べている。

これも事実そのままに書いた日記である。然し直ぐ書けばよかつたのを何日か経つて書いたため、その事から受けた亢奮がその時程強く現れず自分では物足りない物になつた。(註59)

時間が経って落ち着く前の直哉の思いは、次のようなものに近かったのかもしれない。

どうしてかう心が沈むのだらう。張りもはずみもない。——尤も昨日活動写真を見てゐて、第三師団兵の出征の実写で涙が出てきた。一人々々の不安な恐怖が想ひ浮んだからだ。此中にはもう死んだ人間も沢山あるのだ、さう思ふと、それが現在眼の前で動いて居るだけ妙に感じが強かつた。死刑を一番重い刑罰としながら、戦争での死を名誉の戦死といふ。義勇兵だけを出すならいいが、今の制度で、行きたくない人間を強制的に徴集し、そして死んだ時、家人に名誉と思へといふ。それが人間に出来る位なら、死刑は一番恐ろしい刑罰にはなり得ない。(註60)

直哉の他者へのまなざしは、世相を反映して社会化された。その思いは、軍部が台頭する陰に潜行するが、消えることなく、書き残されている。

戦争せしむる事だけが愛国者であるやうに考へ、その結果、日本がどうかといふ事に対し、全く無知なのは、誠に恐しい事である(註61)

人間といふものが如何に愚劣なものかといふ事が近頃妙に痛感される。国際連盟に対する日本政府の態度の如き、如何に愚劣さを暴露してゐるか、日本が本統に正しければかういふ結果には決してならぬ(註62)

軍部なるものが日本の国内の与論を支配したやうに世界の与論を支配出来ると思つた事が間違ひである、日本の国内でも引きづられない奴は引きづられない。まして、遠い国の人間となれば、引きづらうとの意志が見透けば見透く程尚引きづられないのが当り前だ。(註63)

さはらぬ神にたゞりなし、自分は自分で自分の仕事をものにすればよしと

逃げてゐる。これは卑劣といへば卑劣であり、又同様愚劣でもあるが、妻子を持ち、年五十を越すと、こんな根性になる。物をありのまゝに見るの仕事である以上、これではならぬと思ふが、逃避的になる、情けない事である。余りに分り切つた事だから尚それをいつて犠牲だけを払ふのがいやのだらう。人生は必ずしも愚劣な事ばかりではない事を知つてゐる、然しかう愚劣な事ばかりが横行してゐると厭世的悲觀的にならざるを得ない。(註64)

直哉のまなざしは外に向けられ、当時の世相と軍部を批判している。しかし、これらをそのまま公表することはできない時代状況であつたために未定稿のまま残されたものである。彼は、文筆家であると同時に、家族を持つ自分、家長であるがゆえの自分の限界を自覚している。私小説、身辺雑記の作家と評される直哉にも、確として社会を見つめた発言がある。これこそが、彼が心の安定を得た結果なのである。彼の心の安定は、私の視点を離れて自己の生活を作品化することを可能にし、作品に新たな面をもたらしうことができたのである。

註

註1 志賀直哉と、祖母、実母、義母、妻との関係については、拙稿「志賀直哉の『母親たち』」(平川祐弘、鶴田欣也編『『暗夜行路』を読む

世界文学としての志賀直哉』平成8・8 新曜社 324—355頁)

で、『暗夜行路』執筆との関連から考察を加えた。

註2 「大津順吉」 「中央公論」大正元・9 『志賀直哉全集』二巻 平成11・1 岩波書店 165頁

註3 「祖母の為に」 「白樺」明治45・1 『志賀直哉全集』二巻 4—16頁

註4 有島生馬宛書簡 明治39・5・7日付 『志賀直哉全集』十七巻 平成12・7 岩波書店 50頁

註5 「白い線」 「世界」昭和31・3 『志賀直哉全集』九巻 平成11・8 岩波書店 152—153頁

- 註6 「実母の手紙」 「文芸春秋」昭和24・1 『志賀直哉全集』八巻
平成11・7 岩波書店 28—29頁
- 註7 「母の死と足袋の記憶」明治45執筆 初出未詳 『志賀直哉全集』二巻 33—34頁
- 註8 「手帳十」明治41 『志賀直哉全集』補巻五 平成14・2 岩波書店 282頁
- 註9 草稿19「濁った頭」 『志賀直哉全集』補巻四 平成14・1 岩波書店 179頁
- 註10 「或る男其姉の死、自転車草稿」 『志賀直哉全集』補巻四 297頁
- 註11 阿川弘之『志賀直哉の生活と作品』昭和30・10 創芸社 16頁
- 註12 福田蘭堂『随筆 志賀先生の台所』付・志賀直哉*山鳩 昭和51・3 現代企画室 31頁
- 註13 阿川弘之「志賀家御馳走帖」『志賀直哉 下』平成6・7 岩波書店 254頁
- 註14 阿川弘之「志賀家御馳走帖」 256頁
- 註15 阿川弘之「志賀家御馳走帖」 257頁
- 註16 阿川弘之「志賀家御馳走帖」 259頁
- 註17 阿川弘之「志賀家御馳走帖」 257頁
- 註18 阿川弘之「志賀家御馳走帖」 261頁
- 註19 「妙な夢」 「改造」昭和26・1 『志賀直哉全集』八巻 114頁
- 註20 「妙な夢」 115頁
- 註21 「無事な細君——週刊朝日」の「妻を語る」の写真に添へて——
『週刊朝日』昭和27・3 『志賀直哉全集』九巻 200頁
- 註22 森田正治『ふだん着の作家たち』昭和59・6 小学館 55頁
- 註23 「創作余談」 「改造」昭和3・7 『志賀直哉全集』六巻 平成11・5 岩波書店 208頁
- 註24 「城の崎にて」 「白樺」大正5・1 『志賀直哉全集』三巻 平成11・2 岩波書店 4—5頁
- 註25 「城の崎にて」 5頁
- 註26 「城の崎にて」 5頁
- 註27 「城の崎にて」 5—6頁
- 註28 「城の崎にて」 6頁
- 註29 「城の崎にて」 6頁
- 註30 「城の崎にて」 7頁
- 註31 「城の崎にて」 7頁
- 註32 「城の崎にて」 8頁
- 註33 「城の崎にて」 8頁
- 註34 「城の崎にて」 9頁
- 註35 「城の崎にて」 10頁
- 註36 「城の崎にて」 10頁
- 註37 「城の崎にて」 10頁
- 註38 「城の崎にて」 11頁
- 註39 「城の崎にて」 11頁
- 註40 「城の崎にて」 11頁
- 註41 「城の崎にて」 11頁
- 註42 「城の崎にて」 11頁
- 註43 「城の崎にて」 11頁
- 註44 「城の崎にて」 11頁
- 註45 「十一月三日午後の事」大正7・11執筆 「新潮」大正8・1 『志賀直哉全集』三巻 180頁
- 註46 「十一月三日午後の事」 182頁
- 註47 「十一月三日午後の事」 185頁
- 註48 「十一月三日午後の事」 185—186頁
- 註49 一年志願兵は、入営にかかる費用を自己負担することで、入営期間が一年間に短縮される。志賀直哉の徴兵拒否の事情と一年志願兵については、拙稿「志賀直哉の文学環境」(『比較文学・文化論集』11号 平成7・3 東京大学比較文学・文化研究会 41—60頁)で考察した。

- 註 50 「十一月三日午後之事」 187頁
- 註 51 「十一月三日午後之事」 187頁
- 註 52 「十一月三日午後之事」 187頁
- 註 53 「十一月三日午後之事」 188頁
- 註 54 「十一月三日午後之事」 184頁
- 註 55 「十一月三日午後之事」 184頁
- 註 56 「十一月三日午後之事」 184—185頁
- 註 57 「十一月三日午後之事」 188頁
- 註 58 「十一月三日午後之事」 188頁
- 註 59 「創作余談」 208頁
- 註 60 「断片」大正7・10・14日執筆 「解放」大正8・11 『志賀直哉全集』三卷 176頁
- 註 61 「未定稿219」昭和7上海事変以降執筆 『志賀直哉全集』補卷二 平成13・12 岩波書店 508頁
- 註 62 「未定稿221」昭和8・2・14日執筆 『志賀直哉全集』補卷二 513頁
- 註 63 「未定稿221」 513頁
- 註 64 「未定稿221」 513頁

Shiga Naoya's view of life and death

MATSUI Takako

Shiga Naoya is known as an author of introspective, and biographical novels based on his own life. He observed his family, looked into himself and had little interest in the other things especially in his youth.

The reason for his attitude was that the Shiga family was complicated. He was brought up almost by his grandmother. He lost his mother without gaining her affections when he was twelve years old. Then his father got married again to a beautiful woman who was just eleven years older than Naoya. So he essentially had three 'mothers'. In addition, he had been on bad terms with his father for many years.

When Naoya got married in his thirties, he moved out and started his own autonomous family. He became the head of this new Shiga family and was free of his father and 'mothers'. Therefore he could afford to change his focus towards other themes of interest.

During this time, he was in a serious railroad accident and was almost killed. While hovering between life and death, he meditated on the meaning of life and death from this experience. He accepted death as an inevitability which nobody could avoid.

(2006年 6 月 5 日受理)